古今
奇物

蒔絵帖

13
1804
C3

13
1804
巻 3

古今奇談秀句冊第三巻

㊄ 絶間池の演義 強頸の勇 衣子れ智あり 話

絶間池ハ摂津国の池と成らんに絶られ池ハ摂津国の東成郡に属し。今ハ池涸まども狂一の絶ると称す。昔ハ此る林乃地河内茨田郡に附り。遂ことハ絶間の池の垣つゞと倒たる中と成やと思ふんに絶ると池ハ一の絶間より二里ばかりへだゝて衣間村にあり。衣子の絶ると云ふ。衣間ハ脱間の訛ぜるなり。あれ絶間芸に茨田の郡なるべし。今ハ図を見るに絶ると幸ハ図史に弘れたり。此るに摂の小郡に及で霊場多くれ中。用茶望子に茨れ中納言と云ふ類ハ実説れ考べきなくぞ。和尚も切れ。大檀那の面目も茨れ。

ねと云ふ。或ハ人微ふして名とする事なぞ。或ハ罪ある人迎てこ名を変じ。上代の事ハ人事をけとハを世に托ふして人の常

を近くするもあり。抱残孤もるのんハ同じかるべし。也柄の橋柱兵庫
の梁島ゑ縁起せる古法一ゑなるべ。のいちぢめるさハ甲斐国乃
長者の媳れ人拉れむすめあるがゆゑみるとゑ抱がゆハ小男を嗜し
眠りを誘ふ乃戯ゑとなり。西成の北部れ上下れ地ゑ切ゑ本のゑし
ゑ切ゑ切ゑ切れバ不擇をゑ橋柱の迷すゑとゑ。ゑ橋ハ嵯峨天皇の
時動して西生ゑ造れ平安の京ゑ往来して。大江の渡れ辺ゑい
るの大路ゑ俊冥しるる橋ゑるべし。豊崎の名柄済ハ百又十年の
昔ゑあり。大内村ある庄神帝の大隅宮ハ又百又十年をへゑてなり。彼
也帝教の設けゑハ。ゑるざるべし。古昔れ辺ハ水ゑゑ渡ゑて氾濫れ陥す
るゑふく。仁徳れ御宇ゑ浪華の水ゑゑ治めあひ。二室の堤を築て流水
を三国川ゑめくし。名柄川を浚くす。ゑれども れ辺狂常ゑ水淀めど。
殊ゑ内のゑハ九河内と名づゑて水淀の地なり。西北の巨川を流

きるる堤を茨田堤といふ。霖雨洪水ゑ必す壊れ損し。決口又不ゑ
て。幾ゑび築ても土を保ゑず。ゑし御代ゑ欽命ありて。古堤の縄準を
改めて堅固ゑ造ゑせ。モ外異地川なども堤せるゑれ朝議あり
て。人ハいまゑ等くゑるゑゑよ。モ水ゑの水除ゑ穴居せ。陸敷
ゑくも巣と林ト山渓ゑうたして。不をゑるゑるる貌れ魂。人ゑゑ
食を窮ゑを霊奴を妻ひ。老人を殺し小男と変し。小石を抛う
ち。沙を撒し。人ゑ弩を飾し。内時を踏ゑ哀し。れゑ孩児を誘ひ匿し
彼ゑ農奴を逐ハしたゑゑ。土地の人且ハ恐ゑ且ハ怨る。茨田の宇
れ庄治ちゑゑゑの磯笑あり。祖父なるゑの弟まゑて新羅れ征罰の
ゑ軍ゑ渡ゑ。彼国大ゑ勝ゑ敗ひて。ゑの帥を生ゑまり。位ある人ハ衣
馬糸帛を奥へて位ある人を誘紡し。平人奴ハ盒飯壺酒をゑ
ゑて。奴を労問す。熊川と云ゑゑ。酒飯ゑ奥して殺ゑゑる褐色盞

又つ外面のまを誘ふて。大國の素燒ふうハ孫〻ふ。後紀の為ふ法を
ひ〻て陶ふ。ふ〻ふ傳来し守れ又冥と人もまうて。客人あまぜを是
を飯冥ふも用ひるゞ。いふ〻てらあれ子ゞ〻んを取收ふ時ふ一
冥を矣ひふ。主人の色色もふ〻しかふび。甚畏き楽しこ後國
れ井ふ自ら投ふる我家人逸てんひて又く拐ひあげて幸ふ死せざ
れども。心来主を病ふ陽ふ。破るゞふもを笑あふバ。押後の補
ひもるすゞさふ。ふちの法を掩ふんるふを笑を匿しふやと詰
ア向へふも。霧ふ〻ぬふ〻ヤていとん苦しけふ。主人熱ふふふ
拖我弱ゞバ志を矣ふとやらんハ妙除をふふや。惜き冥物ハ褻ふ
も晴ふも用ゞさいされふし。されど用ひざれバふちをふくもふふ
まして磁陶の瓶を餐趣ふ用ゆるかふに。擬するを悔ふもふゞさふ
あふび。色ハ京我道ちふ。体をふふも公ふ挾むとなく快後せふと

慰めふれどいふふを憂のふふてあふゞふ。遂ふ病て矣け
ア。を後いづくふも定めず。家中ふ人の啼哭あふ。人音静りてた
しふに守つけふるふ。行ふ言ゞある。ゆうなるハえ去ゞ哭ふも似る
ゆうなふ。魂のふふてふふと畏れて移除の法とやかくすゞるふも
アとくふき夜ハ家人一不ふこゞふふて畏きあふ。ハを定ゞずれふ
一哭二哭ふれど。夜涼て守ふ子ふに拍すゞて背れきむ〻ゆる。
心をとあて守ふなゼバ裏れふふふ。五冥ハふい。ふ。五冥ハふいふと
いふゆうなふ。心ふふきふの出て守ふゞんとふる時ハ音せぬ折もある。
哭ふれバ冥ハ縮めゞふ耳をそゞバふふふ後の井の辺ふふある
やうなれバいふ〻ゞんそゞ霊魂なふとおふれて日暮きハ屋後
ふもりの法。そ法西ゞにふう来し千穂の岐夫とて。移除のふを紙
しけ是バ。郷民ふ土地の社ふ移さ守せふる。心男ふ夜守れふふふり

絶間物語
古代方格

木津社
三岳川
三野川
大郡高津宮
四熊川
大和川
豊崎
大阪湾

茨田郡
太間村
衣テノ
絶間
千林村
強頸ノ
絶間
三国川
吹田
小郡大同村
大隅宮
三重堤
長柄ノ渡ノ

て一宿しけるよ。そは八稀よ一数そ。明朝後の園よいろうてえめ
ぐし井の内をうくとえ。退いてまだ〳〵そ乱色を窺ひ入てひそう
よ主人よかろる。実よ井の内よ怨霊こりう。未代家の死霊となりて
子孫よ害なるさんそ。そよ怨もそ名つきて賞敬なるべうぞ。主変
を捨ざれい家の難を救ぐう。そよ怨と人よわうて。家れ安堵を
はうりうくとか。主人は怪異をむよ思てようみさえ病ひけまいい
とぐ眼を塞きて。はよ怨を取出して岐夫よ托せ与よ岐夫服を改
め白紙数枚を用て白幣の切りけて。ぐうんちが亡霊を少て幣の
中心よ書記し。一室を浄め上座よ幣を利立て招魂乃業を
ふし。恭しく坐して神已よ祭まろと。よ怨の箱をそなへ玉蓋を
去て取出し。一二ッとかぞへてみっあれば。そそちぐめ改り人乃
誤り。よッの怨はそろひろ抱をと取入れて。撲と蓋をしてろ時

よ。そろろ幣帛ひうとひう振動き霊魂あるがめく。已ふして云。
今ここて脱まろうと。はよ怨を封して迷よ磨下と堅て切めさせて
利ろる幣をとれて。主人と共よ井ふ除こ。井中へ投入まろう。は幣帛
升中ここて行水上よ動くやうこそろる内井底よまぐこそろ。主人を
をえて。眼前よ信をろる。ろは時よ人を呼いて。は井を埋めしむ。は怨よ
ア嘶多宮えず。家内も事静よ。主人の病も快後よ及びうさる
よそも岐まのかぞへろ時ハ分ぬよみっあしうと思られど。さかく
抱ろ〳〵。あうとえもそろハはけ人れも除まやとそやこめ。家よ大戸
れ本荒の宮ハ祭ろ人乃よ絶ざる大社あるふ。いろ乃はようろを
よ怪抱あうそれ。白日みも人を迷ハすとて。未さぐう乃後ハ。は通人
ふし。社の後ある一壇ろき示よ至変あ。ま八屋ありて梁上よ取出
を掛紙ろ残掃む。墨よ上う西面ろれで。撰泉の清服下よ浸へて。百

國乃千帆室に入て訓る。四面れ山迫に眉のめ〳〵深くて。甚と景淀あるに。近ては人跡稀に生志げりて麦の根と埃と腸に乃こ世の言くさと憂さくも。土地の氏族計りて一人れ術師を請来て。怪祀を除き逐いんを妥ぬ。そ人を卑金の麻人といふ。そき大里巨麻の辺に人家に侵宿〳〵居を定めず。厭禁れ法をれて祀の怪を祓ひ。某方神呪を用て病を癒め。牛馬の疫までを祈ふ。き効着のあると人〳〵りてそやらすが。日夜社辺に立めぐりて法をふすに。妖怪も勢ひ衰へられ芸。いまゞ全く除くず。はと〳〵く八吳相の祀に委ねうとして人琴師す。術師法を換まバ怪祀もまゝを変じて人さのみを欺く。大戸れ荘家に多志牙といふ大農乃寡妻。一子を乳して二十ぢうあるが。近所寄疫をいて三月ぢう。思伏逐て疲労をけうく。近る一忘を添て。毎夜大熱発狂〳〵戸みにうち出んと踊ること幾度す。家族あつまり夜眠せ

をちる。いさゝか眠らんとすれバよ〳〵狂ひ出て放出に出を。看人沈枕に行刻の安んをし。たゞ暁天にいたられバ安都にして倦き睡る。一族諸親傍看にたゝて寄うるはし。麻人を請ひ来て祓ひさせる。麻人来ては人てよく我を請招ハバ汝労れにハいとゞ我が祝法をちゝハを寄ろ安眠せ〳〵めんとるに乃ちこそ麻人にゆこ。そ麻人に任せられバ祓異とて祈に為る例あり。是の対帛にあゞぎ。き卑上の祀をする。る端れ吉棄祀とて。左右に拐れ爪をとゝせ。頂巔の吉棄物とてそいてぎの髪一刹をおろして。芸に包に納め是をいて祈に告〳〵と。祈祝を授け枕法呪文を頌へ。病ぬれ耳鼻に吹入まて治う去る。そ衣ハいさゝかも発狂せず。安睡暁にいる。家人皆喜びいさゝて術師の方法を寄なうとす。已に七日ふ経れど発狂なられバ。ぢうに家人乃衣眠安きことを乃ふ。そ法相換の國人に強頸の村主とて大力れ堪えありて祈るのお撲

あうくれば。内裏に召籠まるも遇でさ志引あうて。摂河の間に来り寓を。妖怪の徘徊まる様子にて。毎夜人を用て土人を下知し。聖猫の栖家をさぐり猟出して。捕すて殺すと教を知らぐ。茨田乃武弓司衣子として生れ付地に駆く。百日の考へ為るが如。上地の人徳者と称ぞ。我も亡なすトれ民戸に指揮して。貓を拒ぐの利害を教へ機器を制して雪を以て色を異す。是よりて近くハあふまず。強頭八本脚の蜘蛛の妖怪猖獗を守て。いで投へて強く蛛を結めんと。乾糧を腰に。木蔕に乗りよりて。あちこち逍遥して宮れ後乃聖堂に隠れて欲じて云。此勝景を寂莫の地とるすハ怪物いとぞかり。此業をなす。宿して見ぐ。めんとて。是春の比ハ方一日なれば物蔭あり。殤籠の内にとて見めを重て。立去ぬ。うして日暮れ。夜に入て人まぐ。ぬに来り。殤籠に蔭に潜に居る。二十日ぐらい

此月のぐりてあ相引明るる時。志と〜と足音して近く来ると見れば。髪を振り被き赤裸にて素足なる人大に包めるを脊に負ひて杖を杖きかち〜と歩来る。負ふる包裹をひらき褌を安枕を取り。ねハ色もそう宿して妖怪を投へんと為る足形に出立るなるべ〜とぞよ。此廟南面正座してあのもとさぬ〜に結び。刀を抜じて月中を眺ることあ。両のまに袖缺を抜り両脚を参差に縦り踏横に踏こ。皆法剛あるぞめし。口中呪言し念念唱唱を。俊忽として一陣の怪風吹通りてあるる。西南れ方より空中を来る抱あり。是彼怪物なるんとよるを見れば。礼を髪結そ〜と吹せるぬ人と見て素裸あるが。風に乗るがめく〜ふりて空より吊るやとやり〜と〜して表上よりる。此廟指さして喝と叫ぶバ怪風散ぐ抱曹と倒るを。抱て褥の上に安置し。抱を以て手足に抱せ。ひ。三体尾絞をる

さんとするふ仰られば。妖怪等がめ辻雑礼て人を愚弄するやと。躍り出て妖怪やるると大喜をるる。一撃殘吃らひ。伐ち亜蟹をろうて逃れきると追て玄の茶まて行ちもるゑ失ひよう。今ハ出遣をぐ〜ぶ祢ても一妖のこうこうとろき亜蟹ゑ立還きハ叶厮我ようゑ〜亜蟹ゑ返うわて。まそう椅を拉て大ゑぬう你何厮ぞ撲ようまうて密令を妨ると。椅を振て打まう。強頭も初ハ知れりのこそあれと。打を拖ともせず。あゑこあゑ〜排ひようけて。逐ゑ椅を奪ひうてをうさす一打をるゑ。叶厮眉間を撃れて一椅ゑ眩き仰ゑを仰ゑをあぐ〜す。翁〜嗚呼神退ま〜ぬかる時ゑ玄の茶ようを把火を掲げて男女ハ又人亜蟹そんえるとうゑ多てむ〜〜と喋ぎまる。強頭よ〜多をうけて来るのハいうゑと同ふ人を失ひて捜るるうとゆ。それハ男う女う。若き女なうといふ。さ〜ばあれゑ仮

うハ女ゑそそといふ。爺人立ようえて兄ゑそと悦ひて泣く。裸こそん憂えれと家人ゑ布の単を脱て肌を覆ふ。女ゑ〜熟睡のさまなり。口の滴水玉ゑ結びて新ゑ注けバ。やをう爲の見えるぐぬく。乞ハ宮の亜蟹ゑう。初〜ぎいうふ〜てうゑハ来りしぞ。見んゑもいぶせうりしとゆげく。強頭を打殺〜うる厮ハん初るや怪拖おるぐ〜と。一ハゑ立ようゑ裸神おまバん初うまる〜もゑ〜。被きうる髪をかきあげてよう〜〜えれバ。被させたる御師ゑう。ひうけず彩きそそを故をさそうゑるていゑう。時ゑ強頭已ハ你らも怪拖うと初ゑ念えれず。子細ゑゆせ。言ぞ初〜ぞハを女も返すまぐといふ。汚詞をは〜く〜て此女人ハ我どもが家の主婦ゑるゑ。正月来ようゑ病をいて。近所ハ狂乱を発〜。若〜大燃焼ぐぬく一身ゑ一糸も見させず。ひひさす〜戸邸ゑ元出んとす。抱ぐむるゑ力つよく〜して女乃お

よぶべきようあらねバ男女教人ゝられと壁へて暁よりれバ熱吉て熟睡
す。この法ハ身も痩おとろへ小主人ハ三昼夜ゝ族のゝを傷まし。
こ術師ハ妻法よりう近ゝよ徘回して祝法きるゝ有ゝとて。七日いお
請来さう。盤と爪を煎せて完解乃棄拾ゝ。神呪を授け禁茶を服
せゝむるこ夜より発狂鈴まり。今よりひ七夜よ及ハバ。今ハ拙の気も急
ゝとゝゝと元人ゝあるこて眠るとも完ゝしねよ。戸を引放ちて出る者
す。燒ハ消ぬん速ひて門よ出られど。ゝりゝこの東西定めゝ十方へ
ゝゝこてたづね切。我ゝハ此重茵のゝゝとゝく弱まりて。主人を主
へゆるゝうれゝきた。此術師ハいゝゝて此よ死ゝゝるも知ゝねど。ゝ
へバ初ゝう拙の怪をつけゝるも。狂ハゝゝくあゝしもんゝりして急ゝう
ゝも。術人ゝ不ゝるゝゝとゝひ合せゝると評る。強頭要て妖怪ゝるも人
こて怪ゝゝれと笑ゝ不ゝよ。彼家の男女教ゝきゝまゝ。毎日ゝゝあゝし寝

不ゝよ依回安ゝらゝれぬて在すを拙ゝ良燒ゝゝゝよ家内ゝゝ乱ゝて
ゝゝ外よ出て嘆ぎゝゝきゝう。門の守ゝうをおこゝうおつゝれゝゝゝゝ。ゝ傑
よ化拙の来ゝゝざゝこて天乃のひゝくゝゝゝゝゝ。ゝ言のをゝゝ
ぬよ。此婦人ゝゝゝ元人の牛を潜ゝうゝゝ毛者とゝゝゝゝれ尾を曳て
法ゝかくかけゝゝる。強頭も再ひ忙ゝきゝゝゝ後の憑拵ゝゝゝ浅ゝ恩ゝ
くゝゝと一日よ家内へゝゝゝる。此ゝゝ内なる病婦ハ眠さめて笑ゝゝ
ゝを知ゝず。拙も解てん快ゝゝゝこと常れゝゝ。変化の技不謂ゝゝ
ゝ。ゝ病よ家人の労れゝる間と。術師の奸計をゝす邪念の者よ来
ゝて。病家ハ連累ゝて。術所の急湯をあざむく妖怪なゝゝゝ。術師
れ義令ハ恩報人乃ゝを係ゝゝゝゝ。強頭ゝゝて光を人ゝか
ゝう多ひ柄ゝゝ。衣ゝ作人吹て爪撃を云て婦人を幻ゝる乃邪
術ハ我祈願ゝて効ゝゝゝ。ゝよう婦人の撃爪を人ゝゝへて

受戒などするゆへ新礼の如くなるべし。学ぶ我人を信ずる丹精誠にて
して神霊の在るハ人礼れ敬まるゝ所なれバなり。千里巷の間を行つゝハ
妖術幻術の二つあり。妖術ハ行ひと妄誕をもつて大東武烈の国を行ハ
るゝゆへ。漢土を勝るれ一つなり。えせ見ハ恐べきことあるを妖
人をして幻術をかりて妖術の姿をなし人を惑し。種々あるを
やうゆへて人を誘ふ。必ずハ志れ人を中に混在めてそるを翼けを
寄特を執証して人を誘ひ。彼きて後人をバ引偏しめて誘ひ畏
されて従ものあり。幻術ハ赤漢の時黎軒国の眩人を貢し戯を
表ふ妖ハ非ぞ。めけ時節ハ妖人ゆをうて混雑されバ。一三を正
すへしと。守ゞ家の文学乃事を学て。ゆを保て堅る簪下を塩せ
るるゆ。学の内ハ石の色る残入きて。元の石に堅ませて色堅る
る人を同ふゆ。千家の農監なり。元に岐まり居ゆを同ふ。千後ハ知

らずとゆ。同究むづきるもあゝ。びしてるとゆ。まるる岐まる方ゆ竊
ゆ人を使し農ゆを出しく。先ハ堅めるる新に棄陶ゆもも教
入ゆ堅なゝバ年経て変じるゆと行るべけきハ。山棄陶を入きおき
ゆゝと変ゝゆるゝゆゝ。ゆるる行る今ハ入る。但ゆゆて主
人ゆゆゆ。約をなせし山刀ハまぐ年ゝず。又器ハいまき変ゆるる
ゆやと言伝へ。せゆ。山使ハゆち衣ゆるゆゆ同ゆ。主人ゆてやゞ官
府ゆゆて。岐人が在ゆを。さゞて窮同を。又器ハ已に大和の家民に
あゝて布石弱ゆ。代ゆ。農ゆゆハ岐人ゆ似られて一器ゆかくし。
穂嶋をかし弟をゆくるまで一味あるゆれバ。ゆ人ゆまさ刑に附
せる。井の庭の巡教を出さんとゆ。ゆ時ハ頭を撞撫ゆ深くゆ入き。
堅ゆ添て言ゆなすとゆ。二三多なれど。家内ゆ裏仏を知ゆ。人
礼とゆくゆ術を施す。究竟ゆ弱されるゆ時ハ戦ゆゆするゆも言ゆあ

ろくしと。皆岐人が家へくるとぞ。妖怪ものゝふりうの山家の貧苦を忘
る。裏うて。後ハ狸も傍訓をやゝしぬん。皆のこなるべ河をへゞて
る大岡の古家の辺る和の村日之野といふ所あり。三世後後十
六十三の女を遣し。祖母老られども皆を育し。人ゝ配て爾せん
とゝひとる。女ゝも紡績の業もよくし。絶女の郷も伝へ知ん。
かゝむつまじく。家のりと科線の和他事ゆし。きるゝ和くさう
けゝ人ちらきゝ年女人垣の和ゝ来うて拙やさんと招く。足牙ハ善
へもせずしてあしが。一日来ちらきゝ例として来うられバ。そ陽る
かゝをゝんやゝ。女ゝも出るまゝ不日来れども陽ず。皆母んなゝ
ぞ小姓ゝ同へゝも来れも来ゝず。ゝれおいて常ゝ招くみ人のゝ残ゝ
る。いでそ四年の而ハいづこと求るゝ拙どろふし。古家れ垣城ちる
来の老いゝ。きのゝれ家つゝそ許の島女ん。ゝも垣の壊ようゝ

内城窺ゆふを。そ内ハ貂なんどゝそと畏せしゝ。そ後ハまゝすどいゝ。
三野のやゝゝれを少て常ゝも山古家ハ狸をむといゝ。陽の
人ハやくたどひうて。垣守ゝ許られて内ゝをみ入曲くさう
求ゝ。人気あゝもゝんゝゝず。まゝ凡下恐れ多く進ゝ乃がゝ
き隅くもあゝ中ゝも三野の屋れゝなるなゝをゝくま十八
果皆れて肝をく。世ゝ畏幽霊などのゝを伝事もたゆきゝといい
ひて拙ゝれせぬゝ。それゝゝ山ゝ一宿して同ゝさんぶる拙あゝバ
ゝどゝゝゝてゝんすゝゝ。そ夜ハ被をいゝさ育ようゝて。廉逐ゝ
梶持を枕ゝて。拙家の端ゝ所ゝう。二更の時ゝいう。屋上ゝ井ゝ
て何とゝ嘆ゝく。狸ゝ舒ゝと見れと寄ゝてをゝる。家ゝをお
をひまうけゝれど。それバそゝと見ゝず。狗おどり身もすゝてゝふる
ふくも何でゝう狸の怨ゝさと歯を咬てゝん中ゝるゝ。燈ゝけきた

くまをくゆゝらなり。唐人のさまゝゝる濃あつげるゝ人近くも立
ゝゝでそれハ門家の者ゝ伺ことぞゝゝる入りて叫ゝる。そ和ハ大連小
連の直戸せるゆぞ。よく退き出よ。ゆよけはハ孫ゝゝよ女客来れバ
外れ人を留わがゝゝとゝまゝよりゝもく。絵をふゝてゝんまくも宗門
のいぶせさ。見までよまりでるそ。你化地伯と二郎と新し来て縄よ
かけるそとゝゝ不よ。いひと叫て踏おゝてゝく来るゝそ。もさ新馬の
めく班深ゝゝ垂ゝゝるゝ。よ班擺てゝく出ね我家よ新奴を
迎くゝれバゆゝゝ出ゝあゝゝ。大ハ和よ喰ハまゆんと。そ見ゝ面
ゝゆゝゝねても。知れゝたわさなれと。まかゝ出ゝ女ゝゝて逃ゝよう
ゝゝゝゝ時ゝゝ出れ濃さ腸巻し面を俯てかまびゝゝ女房を
くゝゝてかくまで断つ少ゆゝよ方まゝぞなくふかゝゝてゝく地よ
せんと思縄をたぐゝよせゝゝハ烏蛇の前。したるなゝ。今ハなまゝゝ

ねゝゝ出ゝと。ゆゝなと逃まゝよ。ゝゝあゝゝくゝ内ぬぎよ滾びゝゝる
きくふおもおぼえず絶ゝゝぬ。濠あのはゝゝゝさをふををんも
となくゝんつがんとて見まて来ゝあひ水をそゝぎて。やゝくゝれ
ゝゝ歩ゝさゝも。ぐほゝよ立ゆゝなゝしと。懲りゝく滿ゝ乃
ゝゝゝゝんゆゝゝれバ。彼女房ハかはをまくよ立てゝんおゝをゝ乳
西ハ垂ゝゝ踊る猫よ似く。鍋口の沈の女ゝゝるとゝゝるほどふ。俄よ
ゝの内ゝ膳よゝゝてゝんゝゝゝふゝ。夜ハゝゝしゝゝゆゝをゝ。れよゝ
ゝる枝把の樹さゝおゝさまどはけゝく宅よゝゝ。大よ労ゝくゝ地くゝを
でゝりゝゝ。ゆの夜ハ健なる誰かゝどちゝゝみ合せて十人ゝゝゝゝ
てゝゝ。地ゝゝなゝゝてゝゝる。夜ゝゝゝ地ゝゝゝゝゝ。人多けゝゝを
を甲必なゝやと。次の夜ゝゝゝゝゝゝゝ。人ゝゝゝ。
ゝの小石を数ゝ袖ゝゝ。ゝゝゝ柿を杖て同よ地をゝバゝゝ

よ行べ〳〵とやくそく〳〵して。さるひは南殿の東北射の端よ向ひ坐して。二人よりるるこゝろわさどの〳〵はけ〳〵ごゝろ〳〵とありて来る吳服のさま言ばたのゞゞ〳〵。時を対よう考うを発ち。中央よ坐〳〵るハそ首二ツ並ひ四脚ありて四足ばかりの人のいよひんざのちゝるらとんゆるゞゞ〳〵ひ沸うて。瓦斯ゆ沸ぎが湧生ゝて。舵ゝさとあれこゝるよあ女を主人て婚をあさんとす。必ずせんあ新姻歯ほ〳〵〳〵。別よ年弟〳〵さ女子をえ〳〵こうて。我一生二躯の配偶とせんたあるまでハけ婚儀を延ゞ〳〵とそ〳〵ごのゆうよ笑ひうる。左ふ与そこを言ば安て大よいうゝいうよ狂と袖るる小石をえて中央のあ面よ投つゆ〳〵う。南〳〵ゝもんしぬよ。彼云。野人近さよあう。ゝ〳〵ハ京笑を抜ちん。髑奴出く到て〳〵べ〳〵と令ゞ。よ〳〵躍う出るこを長一丈ばゝ。脇とゝ〳〵さふよ眼鼻口傷ちう。右ゝよ鉞をとう左ゝよ干を振う。

打あゝ石をゝぐてゝらよのこうて我〳〵さよ過う来ゝうもあ〳〵ゞ殺代の色を呑れ。行縁して。化の教をつくすゝふとんを法めて新ゞず。中央の人今ハ巴を百て吞せよゝて医を入うね巴とハ伺ゝるとゝんゝうちあをゝのゝ〳〵さぬゝうあれゝちさ〳〵てよく〳〵ふ〳〵〳〵ゝある女房のゝ母ゞゞやをゝうに。眼細く耳ちさゞ振むゝひて。体さちを要ゝよゝず。必ず肝を失ひ玉ぎゝん。あ人ゝちとむを定め乳をゝぐ〳〵て化られる程をゞけよと。棒を動さんとする時。ゞ女の鼻俄よ暢出ゝると一よゞゝう。あ人の持を鼻よ乾てゝ〳〵みゝるゞを力敬ちゞゝ〳〵ゞ。二人ハ杖を失ひ伺ゝうなさよ。天井屋上崩ゝ〳〵ぞゝ項垂ゝるゞハ困の中ゝよまゝなゝこハ車れ海をなゝぐめゞゝし。海の中ゝうるゝを用さ。下なる鼻ちさ女ゝう失吞んとゝれるあ乃舌尖簸とあゝつゞぬくゝゞさて。滴ゝる涎沫ゝ乃のゝ〳〵く毒乳霧ゝとなゝう

て親をおつる人遷を恐し惶逃るも毒気に蒸ぜられ病のもと
に例き伏て忌気なし。今宵も幸にとさん家れ若もの数人あ人
を人つぐんとて事う合せ。是を接けてくうぬそれよう教て入人なし。
只三世の老姑ハ孫女れてこの人くふしがうて。此吉凶の内にそ
あるうめと法ゝすも理うるる。此上ハ大勢れえようくゝやて
計らうんと俳しくう。先こ人に農のはるはよう堤築の営こに
始う。法勢のもるるの名人まを率て役に続き。王事に勉るの
土功月を累て歩んとするに。彼あ不の脱ゐ古汐とまらび潮となる。
幾さびも空に力を費す。此故に監使以人等ハ苦よりかる水
功れ築らぬるハ生人を沈めて活動の勢ハにとまう根脚とか
ア。ち汐をとるの法あるうを奏るにつさて。法國におほせて死
刑極る罪囚をうまる。時に朝廷に元伺あって。凡刑人ハ罪を犯し

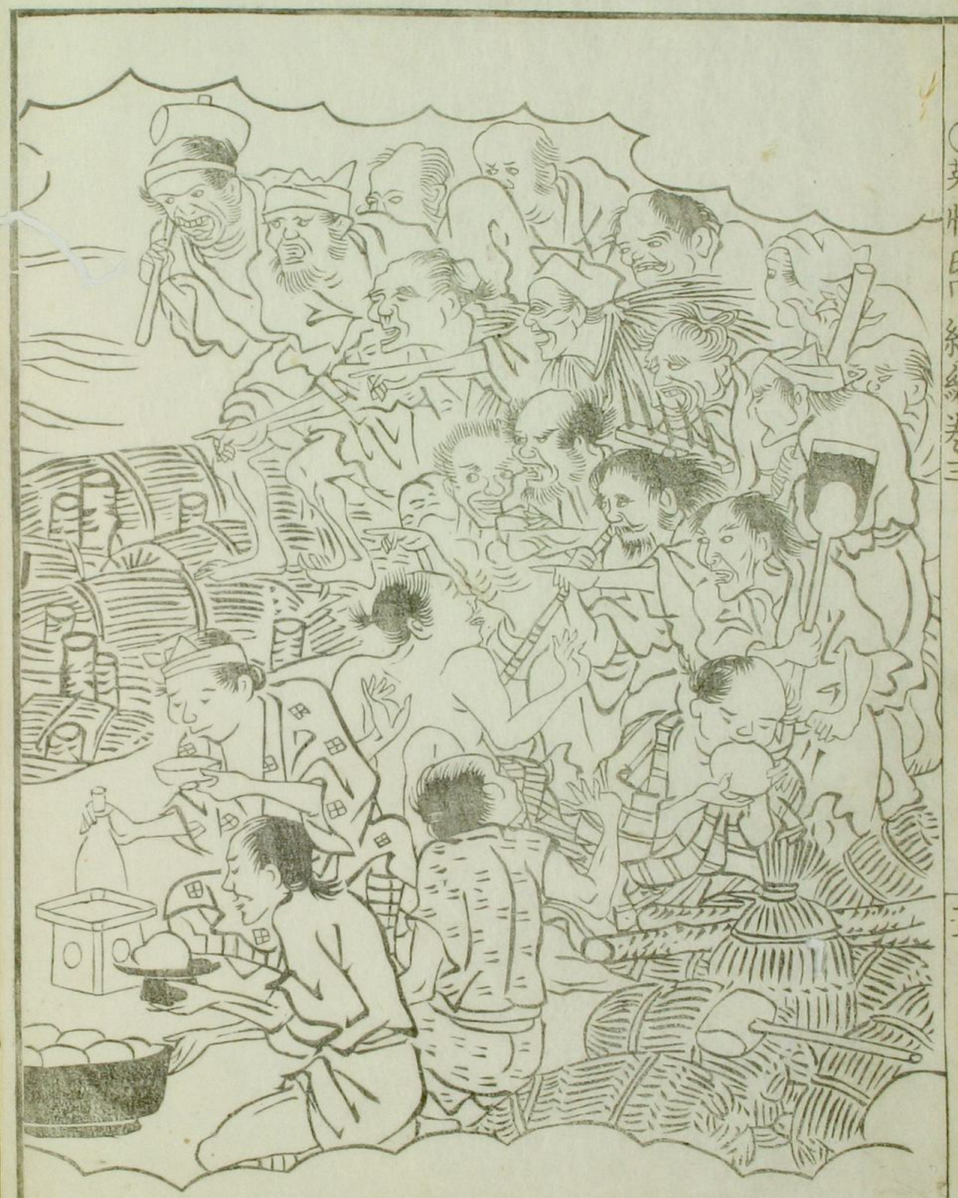
て國の妖孽なれバ。そこ以國の利用をる堤に用ひらるハ者利を求
る得きにあらべ。まって水に越ゝ志むるハ。刑を罪にあるうざる
そあんを水庭に水祢あって堤防の成を勉こ。土を拒て脱ゐ
をおさしるるも似られバ。刑人を潔しとせず。却て忍らん白馬玉
壁を沈めらるに人劣るべしと。區く乃評議を。主上宥恕あって涼く
憂ひあに。一夕の御夢に河伯あう告て。我を殺るに去接の國人
強頭茨田連衣子二人を用て築き殺て決口塞べしとや語に
此の日速に二人に和せて水祢の祭りをなさしめるえよう副
ある強頭なるバ。鈔命と承るよう随使下れ脱ゐに以て國用ど利
し君主のるるおもむく一身伝ぞ惜むに忍ん。力量あるのう
祇んハ用に耐べうぞと。稜る土俵を背肩と衣服に接えて。いざ
や築けとんまに朝しあハせ決口の水庭に躍り入る。こに元人力

をたく〜敷をかけあひて土俵を拵る程よ。ぢはなくず脚をつけて衣をつぐて等さあげよう。ぬなんとするよ此勢氣を脱をる。先より上の決口を築んとて。土功の人ま俄ま場ことこるぞろう。即上れ捲ま押来。あ不の人ま一隊となり。競ひて衣子をとれて沈めんとはく〜ふようひ叫ぶ。衣子ハ一荘の長なるめて。常ま忠り旅水残拒ぐ也。衣人居く馴けり。はま衣子ハ逍遥几ま踞けて新色常れ〜ぬくさのまを等り供ぐる酒飯を給り下て。我新の人ままをちあ〜こ加勢のまま向ひて言をも出さず。目をまて〜ぐえつりくあまバ。加勢ハ酒飯をもはつぐず。人救せんく消るやくま減少を。伎ち拾て一人を投〜しめ。清水を泡けバ勿ち老狸と変ず。衣子杖をいて撲て。孽畜奴通あ〜て霊通ふし。撃殺さんとそ〜どき日ま〜ぐ〜まて放ちやる。此後你ぐ新族をいきしめ此ま穴

ちることなく残ちるぞず。此老狸人のやく言ゆ。いざ公命ま遠ぐ。但し我ぐりのぐ〜ハ先年より水道ま穴ほ〜ぐず。ぢく先代より大隅の天れれ国ま樓こ。今空帝所とる〜ま。狸床の下ま棄ってまそうをもたとめ居りるよ。近来妖人あって遠ま樓こ。異形の神怪を使役して我教を滅う出ゆ。家やうう投どころ残失ひ。小児等ハいまぐ穴ま〜みるれぬ。ちるる〜。教どそ〜かしこ人家ま たよう。老婆とあう女人と化して食をぬすこうすめ及ぐするぐう人ま猜んとする念を起せうとゆ。衣子これを安て老狸をバ放ちやう。今ま土運ま高つて古功成ろの時いくれ。え来此地水勢を計らず。決口の東卑く〜て常ま水流ころぐ也ま古ま。水神人をえの霊あ〜バ山二ッの瓢を元沉めよ。此瓢を元沉ることあ〜バぞんバ何ぞ水神を重あ〜と〜敬ひべき。我ハ妻用の死ま沉まぐ。後度

さる二ツの瓢を決口より投入れらるゝ。忽ち溺ひて大水よりも流れ溺く
と云ふ事なのぞう流るゝあれ又流める水の勢ひ烈しく。いざ
此瓢よりたゝて築けと四方を振て下知しけるバ。衣人いさゝか力を併
せ土沙を俵を投入る。一時あまず脚つけうろ。一同より喊を挙て成就
を賀す。先假りの土沙柵をつけく其日ハ人まを労らひ息ハせ。彼猩
々仇をなして。堤を穿さバ。新さよ成の河安心をぐうぐと。急ぎ宮江
よりて掃りうれ司より請下し。大隅の古文を紙用さんと古人を語
じ。堤築人まをうつして不虞より侍く。大内へ入れ。彼恐まおほさ庭不
ハそのはうつされて大殿の辺のゝ殿ゝ。衣冠も倶より礼服してひさ
よをゝみ乃。麦ちくゝびて。さ文より躍る妖怪あるバ出て面せよ
といひても。なのゝうゝにとてあるゝれ出めづき。新人古て漂く探せん
と計るよ。ゝゝる末の後殿のたまなる局の戸内ようゝけうろ。

彼服より因あゝゝびことゝとゝふよ。織拍の袖より鑑ふりセゝる。年乃やど
伯ひゝるゞ。袖より一ツの笈をさゝげ。そゝを宮やうより歩ゝ袴をさゝえゝと
ふゝちゝして入う来る。正ゝく向ひ合て。襟よりをゝみゝる扇ゝさて敬
恭しく笈を開き。今ハ事顕より面伏あうゝ。ゝゝハゝて先代の古喚
石清貢女の中より。弓月乃秦女として縫師の別高あひゞ。山文より位ある
て後。今の大歌より通ひしなる。織り煩冗ゝゝゝゝ。位をくゝゝ。窮より
此故実より匿れ住ゝ。ゝゝハ出て縫女のゝぞをゝ人孫のゝ女より者ゝ道導
き。静閑自在より所をゝゝゝしと。ゝゝゝ分明ゝゝと。先狂変化現
あゝんと脱ゝる。後上より立ゝる一家の者。之聖の教ゝ化ゝうゝゝめて
姻許の亜不四んと脱をゝする。掃ゝれ司ハ逸て少もしつゝることも
ゝてとゝうけゝど。残るより妖怪の少ゝあるハいゝふと消ゝ同ゝ。秦女云。
独身を護せんゝ。先祖弓月王伴来の経を号敬して。朝拝夕礼お



こらず高く棲る狐狸野猫皆おそれて遠く去る。人として此空
家へ近くよらんとすれバ。必ず驚怖をいだきて去る。其妖怪のさまハ
きくハも知らざる事あり。三輩の二女ハ手系高く通交すれど。近ご
ろ不在とハ知られずして。却て縫の戸ざをしてゐるに。女子亦紡
績れもざにおどろく。薄暮に逍遥の地に立もとおり。行の路を織知
らず。故に我此事にとゞめて教訓を。何ぞ久しく留むべきとて。侍ち是
を呼ぶ。荒らる女官の戸れ口より。両女ハ何とか答ふることもなく。此
姫の所に遊ぶとのことひて出ける。衣子兄弟に問ひ究む。云ふ
う縫袖しけるに。垣を隔て招く少人の絵るかさんとて出しゥ
て見ひて。此古家の築垣の壊きより肉を見入ませるに。るいくさ
かしねこの草にまとはれころぶをみて。垣をこえてもろみ捉へんとする。
此猫の死ミツロツに数まして去ろしかりけれバ。捕らんとするに壊れさ

る所を失ひける。此姫の出来りてうちらよとてふかくかなしみもて宮
にえんなれぬ様しきるすに一日も見えず。其あひだに縫袖のすゝむ
ど皆くるひて今にいたるといふ。已に宮女あることを明なれバ。かゝり
司も取をおき。衣子ハ次にかへり詞をひかへて慎めども。きハめされで
事もなくいひやうなく。るゝにすこし袖かいあはせて。恩方の一室経とたく
ますハ。いかなるたとへにやと問ふ。是ハ漢土のむかし夏の禹王洪水を
治めて後水陸の妖怪を閲し。其形状を挙て。図にハ山海経に図し
金属に記し。外にハ九鼎に鋳つけて。門前に列べ。人民に彼象を
先に知らしめて。鬼神の姦に勝の術。山林に入て逢ハず。魑魅罔両我
本形を人に知られて八害をなすことあたはず。且山海水源を知て水
利の瑞典なり。物ひと散ずる為なれど作んさかりへども。持る金函の
蓋を去て拝覧せしむ。衣子膝行てまにさゝげ見るに是位ち金字の山

海経并に図像あり。頃雑人を畏さんがために出現せる是形は皆は経の図に似ること。は図に委しの。世に野猫はたぶらとをひ合せたる。を帖の背紙に利の御九條を記せ。衣に色を一新して大に水学を発明し。人中に感じ悟ぶ。後の世を那に百済王女の経冢とは。は経をうづみて息城の法とかせうとも伝へよう。弓月秦女は掃も。まとはしく大那の文に沒うまう。山海経の水利の功用ある絃吹峯をる人ありて。泳くまゼ罪を宥されぬ。衣に八三聖の女を王家に送りうとし。彼猛によりて工夫をこらし水勢をさうう。綾て決口に人まを裂めた落ぬ失に加あるとて。伏人の竹をさう。葛城の杉を斬らせ楗を柵う。務殿は葦を移さセ。磐石の危子を撤て土罷をふせぎ。樹くさ千石して。狗尾結縷を布き。稗をまきセ。脱る樂おけせて準縄を改正して下知す。もき木津川の土をりて来る水乃

の勢あるうに。は土小石水に包まれ常に浸潤されども。は河内は陽図あり。陽は此河は床常に高くあり。堤は年々に低くなる故ぞ。脚を厚くつけうして土を寄るにおくるべし。河堤に八抵抱せぬもよし。抑八土を磨きセ落は土を沙とかすとぞ。故水勢を折くに八水を斜に流るを。直に左じて乱杭石篭竹笹激石を設けて水を撥きセ。堅固の振為調ひられば笠置川より迫ちす。桃花の水琵琶湖を吹来す揺落の風ともゆるぐぬ世の変となるぬ。落盛衰に扇守を。て。強頭が人柱に入くるを傷まセるひ。脱なんぞ生民を牲に用ふづき。凡雑事にあるうて八力あるものの知あるものをえらむたえらなきバ。彼二人を用て水神を水除に祭らしめ。功を成んがあるを。役かくも強くびが勇に引しくると猶ませるの。後にそひ合られぞ生贄と被蹂躙して仇人に逞うしハ。猛おどの仇を報ひしるや。強頭の脱る

八ッ水潦〳〵迄池と為る。後の世れ聖流牧唱よ

強頸の舟ハさなぐ〳〵れ人柱衣るよるつ〻流まで地を

衣るの古堤ハ。今古同の東ゆう池田村よりるれるるゆるのこ

きろとうや。を縄引て直なる石を衣る縄をといひ〳〵。後

世さぐうなり〳〵。今れ古堤をやらるん

後の人れ口遊よ

衣るのまことわ〳〵てハ胸あハ〻かつける神乃度さんら

古今奇談莠句冊第三巻終